

「みえの現場・すこいやんかトーク（多気町）」の概要

11月27日（日）に丹生山近長谷寺で「みえの現場・すこいやんかトーク」を開催しました。

当日は、近長谷寺を中心とした伝統文化の継承や女鬼峠の復元などの地域づくりに取り組んでおられる4つの団体の関係者11名の方にお集まりいただき、取り組んでいる事業の内容や成果、行政に期待していることなどのお話をお伺いしました。

《参加団体》（順不同、敬称略）

- ・一八会
- ・ほてい倶楽部
- ・女鬼峠保存会
- ・宮川流域案内人の会



【参加者の発言】

参加者の皆さんから、以下のような意見をいただきました。

語り部をやっていて、自分たちの地域の良さをPRでき、それによって観光客の方に喜んでもらえる、そういう喜びを生むことにやり甲斐を感じている。

案内人をしていると、あまり気にしていなかった近所のお地蔵さんとか道標とかの意味を調べる機会が多くなり、昔の人は、人と人の結び付きとか自然のつながりを大切にしてきたことがわかってきた。

地元の稲作文化を後世に伝えようと車田（真円の田んぼ）の情報をインターネットなどで発信し、中国の大手雑誌にも写真が掲載されたことがある。人口も減少する中で、情報発信というのは重要なファクターであると思っており、攻め方、仕掛けの仕方でまったくアクセスも変わってくる。いろんな方と連携し、お隣同士助け合っていくことが大事だと痛切に感じている。この先、だんだん年を取って、体が動かなくなった時に、次の世代に伝えるにはどうしたらよいか、でも、その伝える世代がないということで、少子高齢化の問題をひしひしと感じている。過疎地域など人が集まらないところほど力を入れて活性化をしてほしい。

東日本大震災でコミュニティの大切さがクローズアップされているが、この地域の世帯数も減少している。県の補助事業を活用して、山里ファンクラブというものをつくって地域活性化に努めており、2軒転入してもらった。

20何年間みんな手探りで、いろんなイベントなどをやってきて、その甲斐があって、知事も来てくれた。「すごいやんか！長谷は」と改めて感じた。小さい頃から、近長谷寺の行事に参加して、年を重ねるたびに、観音様に見守られていることに気付いた。自分の子どもも社会人になろうとして、社会の厳しさに直面したときに、心穏やかになる故郷があることを忘れないで欲しい。観音様は、心の拠り所であり、偉大な存在で、私は故郷を誇りに思う。



【知事の発言】

知事からは、以下のような発言がありました。

限界集落あるいは過疎地域を活性化するための決定打はなかなか難しいが、情報発信を行い、いろいろな行事を継続することで、他の地域の人にも来てもらい、他の地域の方がそのまま定着した例もたくさんあるので、県も一緒になって考え、応援していきたい。

東日本大震災、台風12号などの経験を経て、若い世代の人たちの気持ちや価値観も変わりつつあるように感じている。誰かの役に立ちたい、誰かとつながってほしい、そういう気持ちが日本全体に生まれていると思う。自分たちの故郷、そういうものに誇りを持って、幸せを感じていくことが三重県にとって大切なことだと思う。「県民力で目指す幸福実感日本一の三重」を目指して、現在計画を策定しているが、みんなで県民力を結集して、みんなで幸福に感じられる、実感できる、10年後には日本一だと胸を張れる、そんな三重県にしていきたいと思っている。